

農村の団塊世代

団塊の世代をめぐる論議が盛んである。彼らは日本の戦後社会を大きく変えてきたし、これからも、この年齢層がどう生きるかが、この国のあり方に影響を与え続けるに違いない。高度成長期に育った彼らの多くは、本来的に都会志向であり、したがって団塊世代論も都市サラリーマンについてのそれが多いのだが、農村ではどうだったのだろうか。

激しい労働力流出にもかかわらず、彼らは農村にも団塊として残った。かつて昭和ヒト桁世代が層としての最後の農業の担い手だといわれたが、実は団塊世代もそれに次ぐボリュームを有していた。そして昭和ヒト桁が、労働力としてだけでなく、農村指導者としてもリタイアしつつあるいま、団塊世代の存在感はいよいよ増しているといえるだろう。

農家の後継ぎとしての彼らは、それ以前のどの世代も経験しなかったような波瀾万丈の人生を生きてきた。親の世代が稲作に賭けて、土地に機械に思い切った投資をした経営を引き継いだ直後に、まずぶつかったのが減反政策である。農業者としての最初の挫折であり、多くの若者がここで農外に職を求め兼業農家として生きる道を選択した。

専業農家の道を真っすぐに歩いた人々も、もはや米だけに頼ることは出来ず、野菜や畜産、花卉に果樹などこれまで副業的な位置にあった作目を、新しい経営部門として確立していくことに取り組みなければならなかった。実際、この時期に急速に成長した稲作複合経営は、稲作部門を親が引き受け、複合部門を後継者が分担するというかたちが多かった。それは新技術の導入であり、新しい産地形成やマーケティング手法の開発であり、農協機能の革新にもつながっていった。消費者に人気の有機農業を始めたのもこの世代だったのである。

一方で農村の若い女性の多くが「農家の嫁」を拒否したことが深刻な「嫁不足」をもたらした。彼女たちはふるい農村社会や農家生活の在り方に身体を張って異議申し立てしたといつてよい。それを乗り越えて農業青年を伴侶に選ん

だ女性たちは、もはや単なる「嫁」ではなく、新時代の農業パートナーであった。夫婦が手をつないで闊歩したり、敷地内に別棟を建てて生活するというような農村生活の革新がそこから生まれてきた。その延長線上に、農産物加工などのグループ活動、直売所や産直を通じての消費者との交流に生き生きと活動する今日の農村女性たちがいる。

こう見てくると、農村の団塊世代は、戦後の民主化、近代化が最も遅れていた農村社会の変革者であったことは疑いない。遅れていたために抵抗や障害もそれだけ強かったのであるが、生産と生活の場における文字どおり草の根の変革だっただけに、彼らがたどりついた地点は後戻りの効かない確かなものといえるだろう。

いま「団塊世代は農村を目指す」といわれている。もし、都市からの農村移住や農業回帰の動きがほんものであれば、農村における団塊世代はこれまでにない「補充される世代」となる。移住する側の障害とされる農村の閉鎖性や価値観の違いなどは、農村における同世代の「市民的常識」によって大幅に緩和されることを期待してよい。そして都市から補充される人々を新しいパワーとして生かす環境をも整備してくれるのではないか。

農業と農村の革新勢力であった団塊の世代も、彼ら自身が後継者問題やその結婚問題に悩む時期を迎えている。少子化や高齢化の問題は農村も同じであり、その中でどのように新しい方向を切り開いていくのか、まさに正念場を迎えているといってよいだろう。しかし、これまでのこの世代の軌跡をみれば、危惧よりは期待の方が大きくなるといったら楽観的に過ぎるだろうか。

サラリーマン社会では定年後の生き方が模索されているが、農業には定年がない。団塊の世代は労働力としてもまだまだ現役だし、指導者としてはむしろこれからが本番である。この人たちがリーダーとして引っ張る新しい農業と農村の姿を見据えていきたい。

(北海学園大学教授 太田原高昭・おたはらたかあき)